

昭和五年日記

NOTE BOOK

Made of Paper  
Specially Prepared in England.

Yakian

PB 505

20 Jan

R. Minsokan

CONTENTS

夜光雲 卷三 昭和五年六月 一頁

序詞 . . . . . 一

梅雨晴 . . . . . 短歌 . . . . . 二

螢 . . . . . 詩 . . . . . 二

YUGURE . . . . . 詩並畫 . . . . . 四

雨の夜増田正元上 詩 . . . . . 三

青まき夕暮 . . . . . 短歌 . . . . . 五

驟雨と街 . . . . . 詩 . . . . . 五

紫陽花 . . . . . 短歌 . . . . . 六

須磨浦療病院 . . . . . 短歌 . . . . . 六

針伏山 . . . . . 詩 . . . . . 一

中之島公園 . . . . . 短歌 . . . . . 一三

控針院の塔 . . . . . 短歌 . . . . . 一四

寺花園 . . . . . 詩 . . . . . 一五

俳句一首 . . . . . 一五

仲哀云皇惠我吾野西陵及野中寺 . . . . . 一五

嗚呼竹塙俊明君 . . . . . 一六

見不可見 . . . . . 一七

對技試合松江紀行 . . . . . 一九

# 夜光雲 卷三

## 序詞

僕は二本と二の夜僕の友となりてまに捧げやう。

混沌から飛龍去した一の塊、よ木か地球の生みの親太陽と

偶然にたまたま考へては神への冒瀆だ

君はとほくプロレタリアアフォニマリカムトト立つといふ

と人ならんも能く度々を明かにせぬはなごま

ほんは自分自身をいつの底までアチアチと思ひつるもアトから成立

つるのたから仕方ない

と、お気の毒なかな

今年夏は米園とちを行き全粒のお嬢と遊んで二より

あせ、それは感情の浪費だ、言葉の浪費もつしめ

さて、まんじョシロ同明ぶ、僕は空を怪獣化した四脚馬の事

馬か、すまなにか他の三人で車もひいていそぐ木だ

すくひ帰るすまなからいふ、こころ結つるよ

混沌からいつになく先かアチアチたらう、東の船屋の親は

いつまでも全員の卵をせむやしない

しかし白の娘ははたしくお嬢様のやうなふゆひなを、あせ、いままで

とみ行を子供に玩具、さて一九三〇年の半ははすきたまわら

何の年を誇るの

(まの湯系各各々)

(一九三〇、三、二七夜)

——みゆお、こゝたらう——

## CONTENTS

CHAPTER

PAGE

一 車中 歌 一九

二 松江の宿 歌及詩 二一

三 對校試合 雜詩感想 二二

四 思ひ出の人々よ、蘭丈 二五

五 伯備線途中短歌 二六

六 帰省 短歌 二七

松江の思ひ出 感傷的短詩連 二八

二坂木の人々 同 右 三一

須磨海水浴場で 同 右 三一

増田正元を訪ふ 歌 三三

虹 歌 三三

線路工夫 歌 三三

槐 詩 三四

富下梁の都 感想 三五

帝陵の歌 實歌 三六

夏の雨の籠 短歌 三七

黒土の朝歩 短歌 三七

新詠 身即事 三七

火の見半鐘 三九

梅雨晴 (五、六、二二)

梅雨晴の雨の大地にまた光あまりに強し夏は来ぬか

大地一面から水気はのほろ<sup>大の音</sup>のほろ<sup>大の音</sup>とあしあまらぬ

おほ空は青く清水は木ど水蒸気直る直るして流る、か見ゆ

つゆの雨止めたつゆは此系陽花もすむに、く<sup>小</sup>れと<sup>小</sup>眺めを<sup>小</sup>運る

家を去て急と身にます陽のあつさど三かの<sup>上</sup>空<sup>上</sup>見<sup>上</sup>啼<sup>上</sup>まやまず

X (五、六、二〇)

か(つ)みちの葉合<sup>か</sup>自<sup>か</sup>初<sup>か</sup>車<sup>か</sup>の空<sup>か</sup>忘<sup>か</sup>う<sup>か</sup>見<sup>か</sup>空<sup>か</sup>と<sup>か</sup>雲<sup>か</sup>の<sup>か</sup>か<sup>か</sup>う<sup>か</sup>り<sup>か</sup>は<sup>か</sup>来<sup>か</sup>了

つゆの時今も来ぬか合<sup>つ</sup>秋<sup>つ</sup>の<sup>つ</sup>木<sup>つ</sup>の<sup>つ</sup>ニ<sup>つ</sup>す<sup>つ</sup>え<sup>つ</sup>す<sup>つ</sup>紅<sup>つ</sup>く<sup>つ</sup>け<sup>つ</sup>士<sup>つ</sup>咲<sup>つ</sup>ま<sup>つ</sup>け<sup>つ</sup>り

ゆあゆ水も<sup>ゆ</sup>枝<sup>ゆ</sup>の<sup>ゆ</sup>歸<sup>ゆ</sup>り<sup>ゆ</sup>お<sup>ゆ</sup>ま<sup>ゆ</sup>く<sup>ゆ</sup>す<sup>ゆ</sup>小<sup>ゆ</sup>り<sup>ゆ</sup>道<sup>ゆ</sup>辺<sup>ゆ</sup>の<sup>ゆ</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>あ<sup>ゆ</sup>は<sup>ゆ</sup>す<sup>ゆ</sup>も<sup>ゆ</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>あ<sup>ゆ</sup>る

燃燭 (五、六、二四)

PSYCHE ぶしけえ ゆあゆ水、くらあらと

鉄橋の下も、うらついで

お前の昔の持立は誰をのた

耳の酔拂を舞ひた天舞をたらうか

そん毛下の水か蒸れて溺れ死んか友達どうか

おわりおわりと燃え上るお前の時には生の志を我を

去つた老人の毛を足又とし

また廻り来り来来といつて青白い情熱を燃

暖こてぬた若人の毛を思ひけし

水面近くまで下りて見れば

鉄橋の上までひねり上げて来た

僕は何の<sup>草</sup>糟物もひねり持て水は<sup>あふ</sup>あふ

おまへをそれにとまらして明滅するまへに

おまへの孝性王讀まゝのもの

SPARTA NOTE CO.

一雨の夜、増田のえに (五、六、七)

君をよみこえ、おまへはは世に出た

一そはは<sup>誰</sup>誰のこゝろ、あゝ、二雨の夜に

今日も紫陽花の花は昔々を増す

よすはもう散つてのあしはな

と直ぐお花の中より

君の眼が僕を凝視する

柄、生命の跡はとまらぬか、木々のため

大地の下はちまきな伝を足よーそして

君は静かに床にのたがひならぬのを

おまへやあうたこを見よ

僕に耐(耐)いよ、ふの甘き

お、コフデム、僕はあぢあぢの女にやうたい

まじく君の伝はあぢあぢの雨

とくと大地のうらやうら、こころは明日の日の青はな

おまへをよみ、嗚呼!

病氣に似た増田のえを考へたおまへがきつとこ痛

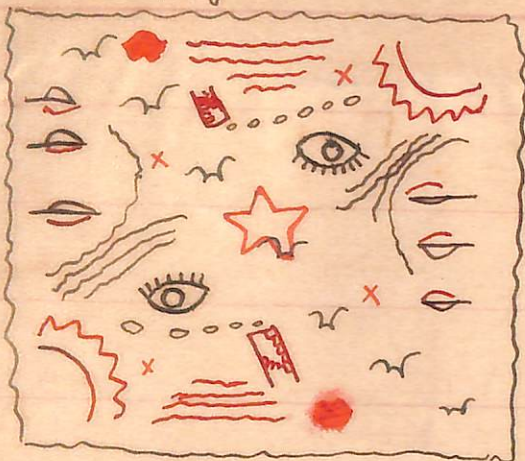
お、とこしほい、おまへは感ぜ、しほくと、神戸へ帰る

お後、おまへの愛おまへを思ふ、おまへの純情のまじく

おまへをよみ、おまへを思ふ、神戸の港、船、摩耶山

そして彼を深く、愛しておまへを思ふ

Yūgure



27th  
June  
1930.

Yūgure Kaiwasei (☆) Umi yori  
kaiyari  
Tōkuno Shima ni Tori wataru  
Koibito no Me Yūyake-zora ni hazayaku  
to omoe  
Sate akaki sono Kuchi wa  
Nishiyama ni iru Hi ka.  
Oh potsurito Hi ga tsuita  
Yoshi naki Omoi wa, Negura e kaeru  
Tori no gotoku;  
Sareyo!  
Shimijimi to raibei seyo  
Kemuri tatsu Atarimi Tera no Kane  
kieuseru!  
— K. Mineoka —

青まりの草 (五、六、二九)

夕まはけふオラス烟と先りをり青まの中の花のさみしき  
 女学校の木プラの茂くしや深みゆふ(雀)ら鳴きまもるなり  
 いり日赤く、つる早稲田に輝きましみみに鳴けは友のニんしも  
 しみしうに夕日雲の端に青まなり 去りやとせまるとの雲の端に  
 海州常山の花既にぬるたりあることのつらふよふ青まはな

勝手判唐の女身らしき感激に浸り馳り得る不幸かつ  
 幸福なる人間はほく ~~あきらま~~ たら。 反省のをも

のと思はれんことをいやはとてうのものをけつまくしてあむ  
 小まが。 増田石えふ、物事を考(る)ふ水。(材料三三)  
うきはそあむ

驟雨の街 (五、六、二八)

夜半鐘をた街に真里一な雲かおそひか、り  
 次の瞬間にはおつらくと大粒の雨がやそ来た。

人々の足は早まる、街頭の品物は取片付けうと、  
 そよからぬは物かやそ来た。

舗道に叩きつけた瀧のやうな水のせう下。

白のふまが道から立上つて

風のちやうどなかく

混雑の刻はもいすをこめた。人家の軒下は静寂した人達は  
 つよやま(なくそよ)を眺めておる。



まこと街は一度人間の手から離れたのだ。

街にはゆまの人もなくしあいの瞬間道を通る人は

黄龍をーおそく

いつそりとした士ふし、そりゆものそりし指

向くは街で足付け出した

粟天地の蝶種園に電燈かつて

の何そある人かすもないとみとかなくおもった

何處まで人が殺すかあるとこゆや、そり気がした。

此紫陽花 (五、七、三〇)

一日の紫陽花の身は静か帰る来り道のあぢさるの草

親しま友の体の破壊ニわかしみとまづかひるるも葉小あぢさる

今キタラスはまより上りいやはこの花とはなりぬ 梅雨すまむとす

かきうりうり狐の手代記、サイラス、マアアにある。

須磨浦療病院 (五、七、四)

一増田云元

病院 病院 病院の坂のぼりるる身に田舎状なまが気の毒うごと

、日おかりの坂の冒さ下、病室と患者達、ひるるをこもりたうむか

、しりじりとサ花園に煙まつける陽の光患の音ら ひるるをこもりたうむか

思ひしよえ気なるこそ、こしけ小仰向けに由たる顔の小ま。

患者等は時局を限り飯を食ひ人と話し散歩するところ。

日日照り時を動くことと(かなはぬ人)らの成百が集つて居る所は。自らを生存競争の激者とは誰も思はぬ。思(は)瘋(ま)はすかない。海岸へ泳ぎに出掛けた患者自らか帰る来た。僕(う)もい(い)からぬ。

青(あ)い花(はな)のつと来てふたつと花(はな)瓶(びん)の花(はな)を見(み)ながら早くなほ(な)た(た)へ。何(なに)も非(ひ)観(かん)的(てき)でないことか。一面(いちめん)花(はな)の君(きみ)の合(あ)快(がい)はと(と)約(やく)束(そく)を(を)了(了)す。沈(しん)黙(もく)安(あん)静(せい)の時(とき)間(かん)を(を)何(なに)か(か)来(来)た(た)の(の)に(に)お(お)し(し)ま(ま)つ(つ)た(た)退(たい)屈(くつ)者(もの)だ。

後(あと)に(に)何(なに)の(の)残(残り)ら(ら)ぬ(ぬ)か(か)思(おも)ひ(ひ)に(に)話(わ)し(し)込(こ)へ(へ)た(た)ほ(ほ)く(く)も(も)余(あ)程(ほど)不(ふ)法(はふ)意(い)だ(だ)つ(つ)た(た)。又(また)血(ち)噴(はな)か(か)出(で)た(た)と(と)話(わ)した(た)顔(かほ)へ(へ)根(ね)が(が)ない(ない)ゆ(ゆ)え(え)に(に)か(か)の(の)言(こと)葉(は)も(も)何(なに)も(も)知(し)ら(ら)ない(ない)。

X 君(きみ)に(に)話(わ)さ(さ)う(う)と(と)思(おも)つ(つ)た(た)針(はり)伏(ふし)山(やま)の(の)景(けい)色(しき)

、<sup>決して</sup>寂(さび)盛(さか)ま(ま)り(り)や(や)で(で)聞(き)つ(つ)た(た)い(い)を(を)弁(べん)当(たう)代(だい)り(り)の(の)台(だい)へ(へ)て(て)居(ゐ)る(る)其(その)全(ぜん)の(の)出(で)所(しよ)は(は)誰(たれ)も(も)し(し)ら(ら)ない(ない)。

、<sup>決して</sup>もう(もう)中(ちゆう)村(むら)村(むら)本(ほん)人(にん)か(か)あ(あ)る(る)まい(まい)と(と)目(め)を(を)橋(はし)の(の)古(こ)本(ほん)屋(や)の(の)お(お)や(や)ち(ち)の(の)顔(かほ)を(を)思(おも)ひ(ひ)出(で)して(して)居(ゐ)る(る)。

、<sup>決して</sup>寂(さび)盛(さか)ま(ま)り(り)の(の)大(おほ)き(き)、御(ご)前(ぜん)子(こ)を(を)本(ほん)は(は)取(と)り(り)て(て)此(こ)れ(れ)で(で)も(も)結(むす)繩(な)を(を)こ(こ)と(と)だ(だ)。め(め)つ(つ)ま(ま)と(と)作(さ)弱(じやく)太(た)り(り)と(と)思(おも)ひ(ひ)た(た)り(り)も(も)下(か)山(やま)や(や)と(と)考(かう)へ(へ)て(て)は(は)又(また)の(の)ほ(ほ)ろ(ろ)。

、<sup>決して</sup>あ(あ)の(の)頂(たか)ま(ま)で(で)の(の)ほ(ほ)ろ(ろ)も(も)出(で)す(す)ま(ま)ない(ない)心(こころ)か(か)あ(あ)る(る)。頂(たか)の(の)向(むか)ひ(ひ)の(の)向(むか)ひ(ひ)か(か)見(み)たい(たい)い(い)う(う)だ(だ)。一(ひと)人(ひと)山(やま)に(に)の(の)ほ(ほ)ろ(ろ)の(の)細(こ)い(い)下(か)山(やま)や(や)と(と)考(かう)へ(へ)て(て)は(は)又(また)の(の)ほ(ほ)ろ(ろ)。

、<sup>決して</sup>ま(ま)み(み)の(の)あ(あ)り(り)子(こ)の(の)病(びやう)虫(むし)の(の)穴(あな)か(か)見(み)え(え)て(て)居(ゐ)る(る)。帽(ぼう)子(こ)は(は)あ(あ)る(る)まい(まい)と(と)も(も)見(み)え(え)ぬ(ぬ)た(た)う(う)が(が)ら(ら)。山(やま)裾(すそ)を(を)汽(き)車(くるま)つ(つ)ら(ら)な(な)さ(さ)す(す)お(お)け(け)ま(ま)け(け)う(う)内(うち)心(こころ)を(を)見(み)入(い)る(る)人(ひと) ~~ありあや~~ ~~ありあや~~。

、<sup>決して</sup>山(やま)の(の)中(ちゆう)腹(はら)を(を)又(また)鳥(とり)ま(ま)あ(あ)な(な)り(り)な(な)め(め)に(に)ち(ち)本(ほん)は(は)陽(やう)光(くわう)を(を)う(う)け(け)て(て)金(かね)色(いろ)の(の)つ(つ)ぼ(ぼ)と(と)。と(と)ん(ん)い(い)、と(と)ん(ん)い(い)も(も)う(う)一(ひと)羽(は)松(まつ)の(の)内(うち)か(か)ら(ら)ま(ま)い(い)上(あ)る(る)。口(くち)の(の)由(よし)の(の)標(しるし)か(か)お(お)か(か)な(な)な(な)ま(ま)こ(こ)と(と)。

、<sup>決して</sup>二(ふた)本(ほん)を(を)お(お)み(み)と(と)此(こ)の(の)わ(わ)の(の)わ(わ)に(に)あ(あ)る(る)や(や)は(は)あ(あ)ら(ら)は(は)ま(ま)て(て)山(やま)の(の)ほ(ほ)ろ(ろ)の(の)か(か)さ(さ)み(み)し(し)め(め)つ(つ)た(た)。

ふこのぬぬ 山の霞さびしけはきみをあもるて帽あつらんけり  
舞伏う山の隅よ君のるる雲の向ふに  
やまよしの林にも木は陽の光

日向まじりの眩暈感してこの歩路。まゐる一人をさびしとおもふ

、鳶鳥のまゝ穴をほけ木はひびひのうとなくこゑのかかきこゆるまみしと。  
港から汽船が一隻出て来た。他の船は静かに漂いてゐる。

、山下を通過する汽船の上立つけむりながか、つらなり海の面をまゆる。

瀬戸をたて、淡路島見ゆ舟の國淡路島見ゆ船通ゆゆけ。  
こは穴をほくくもくく内海の島戸改すぬに見ゆるともなまはた。

、鉢伏の山の頂の榎木やまきの葉のなるさまは水はまよらし。

生小てぬらう二たのぬらふまり世たはた枝のたをふこ木の實はまきをなまえあかともひくも  
喫うも

、草花をよとみゆちほこ、まけかんと日むかりあつしししみじみとあつし。

、青ま丘つらなり長く眼目下に傾し傾斜ゆるまは播磨國系、  
心におもひ置りまたりし北國の丹波坂本にのくして見えず。

、二二からも見ええり病室かの窓にまきあふと海に見入るも。  
、高處中は見ゆる水脈 海をゆくかの船等には知らぬおるらあ。

海の果に汽船も通へんうかま梅いの心はやめすもなし。

× 君にはほくの母のこもうしてあたい。

おんはははまにわたらふ日ひの如くたあときものを、あたたかきものを。

、あめしとほくは一の呼吸したまふし淡路島まなかに見んは、いのちかきしも。  
、しみじみというちあなしもおんははにあふかせたけを見せ替まつらあを。

、ほそほそといちいけるを眺めませ。淡路島山をゆくも。

、ゆく白く汽船通るもちほらしま、一人の友は病中ニやりたり。

いつかまたおもひを寄出ゆ水とらう。あつま日。こにほのおもひたりと。



钵伏山 (五七六作)

まひる山道をのぼるゆけは  
何かしらにさなれいのよ。

道の果は山の頂。

茂つた木、土や土やとゆゆるのよ。

頂の向きの北はまきとすみとけり

遠いお三かしの世界を思ふはすのよ。

ほく、何ししてものほらふにはすまなくて

ひとり寂しむをから山道ものぼつてあつたよ。

x

遠く山裾にひろがる病度。

白い建物は南に向ひ

前には花の一杯ほいた庭かあり

窓か一つあつてカーテンか上つてる。

呼んで見えたときこえぬものゆえ

ほく、帽子を脱いで搦つたよ。

こゝも誰の目こく木ようそくと思ひなすも

x

淡路島と紀州の志摩界と向は

ずぬ分、離れてゐるのだな。

そのまん中に島が二つ。



*Myrica rubra*, Sieb et Zucc.  
楊梅科 やまもも

SPARTA NOTE CO.

大海から大洋への潮流には  
ずる分を邪魔せらるるから  
年々と二本らの島は  
蝕まれて行くことなり。  
あの島の肉を汽船が通るならぬ

x

直ぐ書のは叔父は

人のみぬ楊梅林

地にササチた實を拾ひ

栗鼠のゴト食はぬとも

落葉小け訪ひまゐる人ら

先刻から食や過むた

楊梅の實にほく

腹を毀して痛み叶ふとも

誰も聞きたつてまい

しかもは、はく楊梅の枝を折り

人のあふところへの

土をまじしやと思つたのだ。

x

眼も開いて逝主人を思ふは

大穴にはつまじいおもなげ

眼をこすり、木ば、痛いのだよ

強<sup>ま</sup>すたる陽がまたたいた

何く、せん方なくて

日と背いて、世原を

おのれおのれと、今かけて行ったよ。

x

あ、誰か、感傷を持ってまいぞ

此の山の尾は隣りの山にっついま

はるはると一連の大山脈。

人内の工<sup>ぢぢみ</sup>、白ま家山裾に這<sup>お</sup>か

中腹に土(及)はない。

何と怒鳴らうとも、ほくの声は

世原のしみこみ、松林に吸けし

下田<sup>か</sup>には風ふさい。

その故に、何く、も、下<sup>お</sup>山をい

何くの声をヨサゆやうのとも思つた。

x

あ、少年の感傷を笑う人は

少年時代を持たなかつた人だ。

中年にして、感傷をもつは

すあまうも、可哀さうな、嘲笑的



Merium odorum, Soland.

SPARTA NOTE CO.

ほく、いそかに、将来の

感傷の清算の日をおぼろ。

中之島公園 (五七七)

植込に夾竹桃の花咲き土わらう浮浪人等は行<sup>か</sup>た<sup>り</sup>

紋<sup>を</sup>食<sup>め</sup>眼<sup>は</sup>眩<sup>ま</sup>夾竹桃の紅の花に夏日させ<sup>は</sup>

大川の水は濁<sup>り</sup>う午過<sup>る</sup>の空<sup>の</sup>くもりに汗<sup>を</sup>流<sup>し</sup>

噴水も水おまき<sup>け</sup>さる<sup>ま</sup>ひる<sup>ん</sup>たのしま<sup>ず</sup>み<sup>は</sup>た<sup>た</sup>被<sup>水</sup>

巡<sup>り</sup>般<sup>に</sup>す<sup>ま</sup>ゆ<sup>き</sup>し<sup>ち</sup>と<sup>い</sup>ん<sup>を</sup>解<sup>き</sup> ~~波<sup>の</sup>ち<sup>を</sup>せ<sup>て</sup>ま<sup>る</sup>ま<sup>る</sup>なり~~

いた<sup>た</sup>た<sup>と</sup>山<sup>を</sup>洗<sup>へ</sup>る<sup>水</sup>の音<sup>を</sup>な<sup>り</sup>と<sup>い</sup>し<sup>も</sup> ~~艇<sup>は</sup>は<sup>る</sup>か<sup>な</sup>る~~

夾竹桃の蔭<sup>に</sup>いる<sup>お</sup>せる<sup>人</sup>の古<sup>水</sup>夾竹帽<sup>を</sup>飲<sup>し</sup>とお<sup>も</sup>一<sup>り</sup>

川田順の歌と吉江孤雁(高松)の文とで懐かしい

本の夾竹桃、大阪の地方色も兼ねようと思して

ものであらう。

生活難の老人が先日身投げせしお濠<sup>の</sup>端<sup>に</sup>夾竹桃の花

南<sup>より</sup>陽<sup>移</sup> <sup>本は</sup>来<sup>たる</sup>夏<sup>の</sup>日<sup>に</sup>夾竹桃は花<sup>を</sup>開<sup>く</sup>なり

X

敗戦の人の群とは

遠くより流水来<sup>る</sup>此<sup>の</sup>花<sup>か</sup>

一番高相<sup>を</sup>忘<sup>れ</sup>は<sup>し</sup>か<sup>も</sup>先<sup>に</sup>か<sup>ゆ</sup>

しかしその花の紅の色は



数日來の空腹の身には

焦れた土の穂となる

あふりの花よ 我が單衣の

汗を凝視めるからい。

控訴院の塔(五七八)

控訴院の赤煉瓦の塔に雨をそそ 鐘鳴らずして 昏黄の日にけり

川向ふの古の赤煉瓦。控訴院の窓のいくつかに 灯あかりつきたり

雨をそそ大川の面は芥流氷いたくわしきりへとなりぬ

~~控訴院の前の塔に雨をそそ 銀の建物~~

夕土は鳥おるとも 法院の塔のむかひの雨窓のくらさ

しとしと大川の上は降る雨にゆへへわびしく 水堰ゲムの灯あかりも

91

ほく、でい、つたんと (湯原冬美の史を研究会操と)  
二七(二五七八)

幾百の白い手か 廻轉する車にしかたて

流水た血が空に大まぐらんミネーレコレとなす

血をどうな斗争、新しい白い手入用と

ほく、女からずいそ若心なるとか

ふらふらと兩人の手を差上げやりとて

ほく、でい、つたんと 河の血が虫やうものか、

そとば日毎日毎年の運命の線と眺めて

胸に念ひ下り虫をおもふ。

No.

ある花園を (五七、一一〇)

夏はそと自身の中へ後へ来り秋を世蔵してゐる。

向日葵の花の精力の輝きには

秋の粟<sup>モミ</sup>黍<sup>ト</sup>から久し人の心もさるとおもふ。

雨の来る穴に喜ばばおらの木の叶木よのは

そをゆすくわしきみそを深土を感せしめり

びんぐ草、金蓮花と。何と昔臭い花はつたうい

はるか幼少の思ひ出の耐らなく胸を抑へり

ほく無花軍木の木蔭に花園を眺りてこのを。

俳句一首 (五七、一一一)

夏山や蛇を恐れし紺脚絆

仲夏天皇惠の我長野西陵及河内國野申寺

(五七、一一一)

大御<sup>ほみ</sup>塚<sup>つか</sup>しつもう深げ小やみつじ草<sup>くさ</sup>しりみきた生<sup>な</sup>て花<sup>はな</sup>保<sup>たも</sup>ちある

朝涼のみささぎの本に<sup>に</sup>しんと蟬<sup>せみ</sup>鳴<sup>な</sup>ましき雨<sup>あめ</sup><sup>か</sup>はらすも

あのか身も不可<sup>ふ</sup>非<sup>た</sup>を<sup>を</sup>しと思<sup>おも</sup>ひある、道<sup>みち</sup>へ明<sup>あ</sup>るを<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>むの<sup>の</sup>花<sup>はな</sup>に

二雨<sup>ふゆ</sup>ある朝<sup>あさ</sup>を<sup>を</sup>田<sup>た</sup>に出<sup>い</sup>て草<sup>くさ</sup>すける人の<sup>の</sup>昔<sup>むかし</sup>氣<sup>き</sup>をかえかとおもふ

萬木に朝あす雲の空おほひ<sup>雨も</sup>降之とまに家に帰<sup>ら</sup>ず。

× 辛國神社 (藤井孝村園三子)

朝のこもる日若くし<sup>道</sup>ま<sup>只</sup>み<sup>入</sup>れ<sup>し</sup> ~~朝のこもる日若くし~~ ~~朝のこもる日若くし~~ ~~朝のこもる日若くし~~

×

曇り空のめんまに立つ白雪を日暮しとみおの道<sup>く</sup>の向ふに<sup>と</sup>ろ  
葡萄山の葡萄葉の動まよふを<sup>葉を食む</sup> ~~葡萄山の葡萄葉の動まよふを~~ ~~葡萄山の葡萄葉の動まよふを~~  
葡萄葉に硫酸銅の結晶ありあしあつまるとよみかゆなり

こもる空を<sup>と</sup>りとして<sup>と</sup>り<sup>と</sup>す。み寺<sup>と</sup>て<sup>し</sup>も申座の<sup>と</sup>と。  
頭は<sup>と</sup>く大まな<sup>と</sup>改<sup>と</sup>勒<sup>と</sup>甚<sup>と</sup>下<sup>と</sup>陸<sup>と</sup>像<sup>と</sup>く<sup>と</sup>く<sup>と</sup>き<sup>と</sup>拜<sup>と</sup>觀<sup>と</sup>し<sup>と</sup>る。

夏草のしげくをいた小は<sup>と</sup>吸<sup>と</sup>り<sup>と</sup>そ<sup>と</sup>お<sup>と</sup>深<sup>と</sup>久<sup>と</sup>松<sup>と</sup>の<sup>と</sup>墓<sup>と</sup>を<sup>と</sup>所<sup>と</sup>訪<sup>と</sup>ふ。  
行<sup>と</sup>勒<sup>と</sup>甚<sup>と</sup>陸<sup>と</sup>を<sup>と</sup>す<sup>と</sup>外<sup>と</sup>堂<sup>と</sup>の<sup>と</sup>ひ<sup>と</sup>見<sup>と</sup>る<sup>と</sup>出<sup>と</sup>世<sup>と</sup>した<sup>と</sup>ま<sup>と</sup>る<sup>と</sup>有<sup>と</sup>遠<sup>と</sup>か<sup>と</sup>う<sup>と</sup>し

×

二の横道<sup>を</sup>こ<sup>に</sup>こ<sup>に</sup>廻<sup>へ</sup>る。

緑松一<sup>と</sup>群<sup>と</sup>立つは<sup>と</sup>藤<sup>と</sup>井<sup>と</sup>寺<sup>と</sup> ~~緑松一~~ ~~群立つは~~ ~~藤井寺~~

嗚呼 竹塙 後明君 (五七一三)

圓らわくまの<sup>と</sup>水<sup>と</sup>急<sup>と</sup>に<sup>と</sup>悼<sup>と</sup>文<sup>と</sup>を<sup>と</sup>の<sup>と</sup>ん<sup>と</sup>と<sup>と</sup>は

昭和五年七月十一日 沼江沖にて心臓<sup>と</sup>を<sup>と</sup>蘇<sup>と</sup>

瘴<sup>と</sup>の<sup>と</sup>た<sup>と</sup>の<sup>と</sup>水<sup>と</sup>眼<sup>と</sup> <sup>午陰四時</sup>

なかなかに信おろし心あててこずおついは<sup>と</sup>余<sup>と</sup>し<sup>と</sup>来<sup>と</sup>れ<sup>と</sup>や<sup>と</sup>け<sup>と</sup>良<sup>と</sup>は<sup>と</sup>。  
ときをける<sup>と</sup>氣<sup>と</sup>つ<sup>と</sup>そ<sup>と</sup>悒<sup>と</sup>然<sup>と</sup>と<sup>と</sup>する<sup>と</sup>。生<sup>と</sup>ま<sup>と</sup>て<sup>と</sup>お<sup>と</sup>た<sup>と</sup>君<sup>と</sup>か<sup>と</sup>却<sup>と</sup>り<sup>と</sup>お<sup>と</sup>な<sup>と</sup>い<sup>と</sup>た<sup>と</sup>。

何ともし遠くたつたうら

一昨り不昨りまひり

君と私の（心をうけ

手あふしい 勉強をうすすは

遊りをするい、友を産たつた

一宿まうし 勉強や、のいてぬたらけうを思ふおと玉いまほろも

ゆきあそも 習やうしきやうけ水は

かゝるかをしめわくう非おそぼんとは

誰のこゝろぞや

青海い 陽のあまるとあさひるをまめのうちを一死なしめしは二水

青海い 心のあはれてあたいはあつこおせあまみを見あひましか

めだをばはいまはあひ得じ あまうりも早まわのれをいぢまあや

はめのためわくらはわのたま あたゝとあひ又あてあんわから品めたうき

何す本はぶぬてあもはおおとつり 一無意のかわれのこゝろ久いなうあとは

今うは海 驚きんわん 根を抱えかゝる

泣ける泣ける魚の海に入りしま、のへうぬころのあもあけん地に

あみすも 海に入りしま、きみかたまついあへうずあなしまあころ

x 本心にせよとや。

思んてらうあましみの侍をつらうのはあ木のけありの侍とあうあま

見不可見 (五七、一三)

○竹崎君のわが日直後の罪を許したまへ

はかあしとほのあしや

まゆみ、ゆたまとはんまよらん

まゆみ、ちんろ、すにくつよえ

ゆたまとらんのはりまうくありませ

ゆたまとらんのはりまうくありませ  
復活の日まで、その日まで

○小林博元君の墓を訪ふモリ (翠千蓮社奉養上人務孝博元和尚)

あなをこまつて位いたりの、世つくと、み草をへの、根の本木(も)茂りたるは

み草を、四へしまめを、まうげ水を、手向けわん、去来は、こ木のみと、思へり

まゆみ、おみを、縁、むんまわして、ままか、うわん、らりの、留、おの、おを、を、胸が

すくも、うづら、うとし、と、あな、し、ま、は、さ、う、わ、お、お、も、の、う、す、ま

X 悼竹崎君

み草のりの日土(か)の海まうくと、のいよ、ひ、を、た、り、つ、木、を、ま、も、の、か

おへ母の、お、ま、の、竹、い、つ、の、日、の、わ、ん、ら、さ、の、木、を、お、お、し、

一死をおうお、お、の、木、を、お、お、し、  
た、ら、ち、な、お、お、し、

○松田一郎君、橋本と道六郎君、逝きすと

つむつ、い、んの、死、す、を、聞、く、ま、し、の、ほ、そ、ま、もの、か、せ、ん、を、け、う、は

つむつ、む、へ、知、る、人、た、ち、は、死、ん、行、く、を、い、ま、さ、う、ん、い、ま、の、い、の、さ、を

たのこはあは( )

一、お、え、よ、ゆ、の、一、死、の、ゆ、わ、お、く、と、逝、ま、り、わ、ん、ら、を、お、お、し、お、お、し、お、お、し、

對校、誠合松江紀行

一車中 (五、七、一四)

九十九の隧道に弱った。

ける畑にまきおらす鳴くあつくるよ

汽車すまゆけるたまゆらを閉き (藍寺)

線路行手ん大まくカーブして

赤いコブたん (三田)

小石まき河原に群咲く月見草

晝近くして赤くしほみたり (三田)

河原のサエんつちか水ほしいま、ん屋より

草を食む馬のあはゆす (下夜久野)

回んほの瞳にあやみ花より

遠方の山脈の上ん (三田) (三野)

丹波の山脈をたたり小倉地

何もなき田ま草十山 (三田)

何もなき田ま草十山

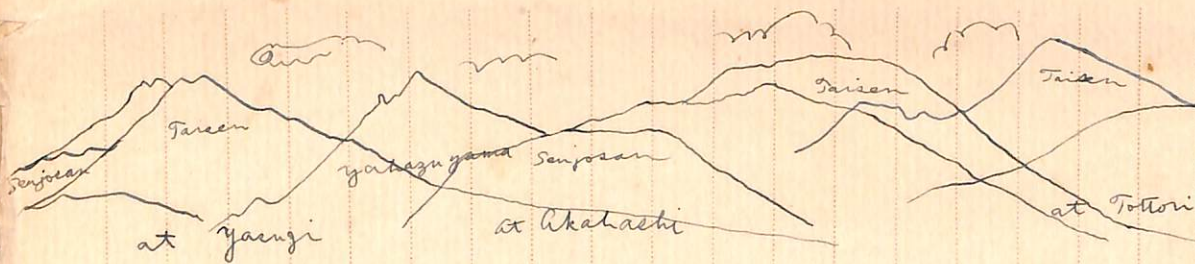
何もなき田ま草十山 (三田)

何もなき田ま草十山

何もなき田ま草十山 (三田)

何もなき田ま草十山 (三田)

何もなき田ま草十山 (三田)





原は極く静かであるが海へは通じぬ。  
大山の裾野の連り ~~海へは通じぬ~~ 海へ流れ入る。(赤崎)

大山の裾野の柔畑、草を刈るて女の家は遠からうとおもふ。  
大山の林扉からつづく赤松林はくんと重々輝のたまふ。

田舎の島 ~~海へは通じぬ~~ もりてうもたし ~~海へは通じぬ~~ 島の探しはらくむ止めず。  
おまの島は ~~海へは通じぬ~~ もりてうもたし ~~海へは通じぬ~~ 島も定まらぬ。

大山の北の斜面のよる山崩の眼へ迫りて ~~海へは通じぬ~~ 王はあり。  
大山の ~~海へは通じぬ~~ 斜面の急傾斜 ~~海へは通じぬ~~ 山崩の眼へ迫りて ~~海へは通じぬ~~ 王はあり。

大山の ~~海へは通じぬ~~ 斜面の急傾斜 ~~海へは通じぬ~~ 山崩の眼へ迫りて ~~海へは通じぬ~~ 王はあり。  
大山の ~~海へは通じぬ~~ 斜面の急傾斜 ~~海へは通じぬ~~ 山崩の眼へ迫りて ~~海へは通じぬ~~ 王はあり。

大山の ~~海へは通じぬ~~ 斜面の急傾斜 ~~海へは通じぬ~~ 山崩の眼へ迫りて ~~海へは通じぬ~~ 王はあり。  
大山の ~~海へは通じぬ~~ 斜面の急傾斜 ~~海へは通じぬ~~ 山崩の眼へ迫りて ~~海へは通じぬ~~ 王はあり。

その二 松江の宿

互に相客々ぬあり。今更ん少ぬかやんをいとの。

城山にて

○ ~~古典的な~~ 観念清い ~~観念清い~~ 舟の糸のありその不可解を感じぬ。古城で

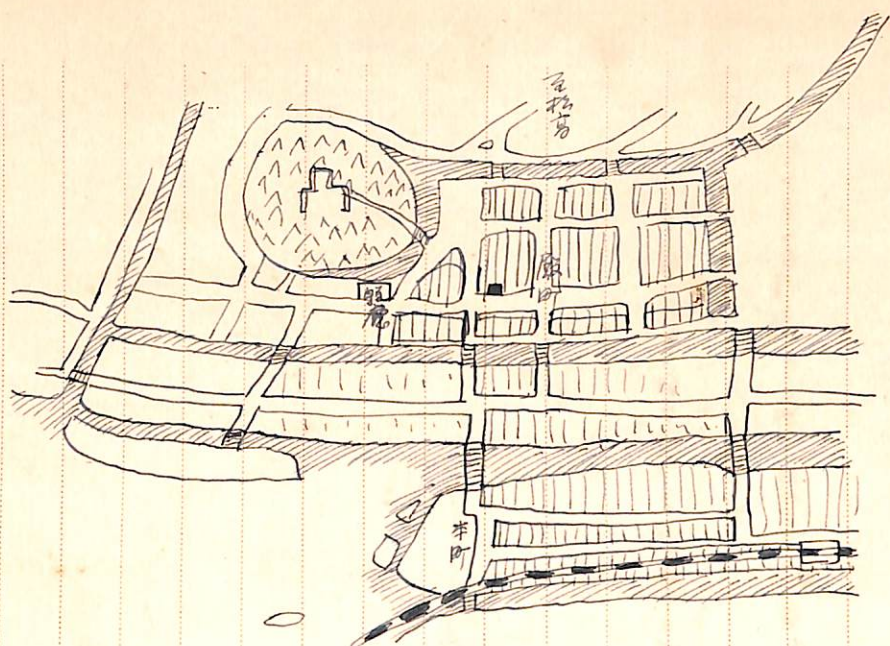
練習中後の ~~練習中後の~~ 鳥くせみの三喜ま ~~練習中後の~~ 鳥くせみの三喜ま ~~練習中後の~~ 鳥くせみの三喜ま

何事もしるさとおもふ ~~何事もしるさとおもふ~~ あしあつくしや ~~何事もしるさとおもふ~~ あしあつくしや ~~何事もしるさとおもふ~~ あしあつくしや

とほく乗て ~~とほく乗て~~ 舟 ~~とほく乗て~~ 舟 ~~とほく乗て~~ 舟 ~~とほく乗て~~ 舟 ~~とほく乗て~~ 舟

○ 湖の面を ~~湖の面を~~ 舟 ~~湖の面を~~ 舟 ~~湖の面を~~ 舟 ~~湖の面を~~ 舟 ~~湖の面を~~ 舟





SPARTA NOTE CO.

根館の家先へゆへ、いんけけのまき先へしとゆへらちつ。

まうきりす鳴くニ思しけきニの事重も、此道ゆなとはるれたく申ゆへ(おぼ)

てきし 現実逃避とまめらるゝ子園め

まらきりす書中へ鳴くニ思し物とをへはまはらぬの蟬のニ思まむれ。

~~おぼのいんけけのまき先へしとゆへらちつ~~

~~おぼのいんけけのまき先へしとゆへらちつ~~

168 ~~おぼのいんけけのまき先へしとゆへらちつ~~

x

おれの神程の先で蟬かこつて鳴りてのへせ一七

おれの目の中でけやんかやん。

おれは血盆宮の中へ舞の曲をかよはず。

おれの俺は人まのニとて母やんらぬか。

x

何故おれはふくのまはとしかおぼはねなるぬか。

なせおれはふの前を道と朝とて世曲はなるぬか。

又なせおれはふの前を道と朝とて世曲はなるぬか。

ふかやらうら。

x

ナイーヴといふことはかたつて新しい的なことだ

デリケートとは小心で新しい的なことだ

それ又のさかひぢやないか。

いやだなあ。

勝利の榮光

大高に輝く

13-11

波瀾重疊四時間の長試合の後

大高の野球戦

三勝三敗一引分けの後をうけた大高は、三勝三敗の野球戦は共に必勝の意気物にたいけに前線沸騰の裡に十七日午後松高球場に開催、四校野球試合の華々の名に背かず観衆は兩側のスタンドを埋める、試合は梅雨上りの涼風わたる菅田ヶ丘に午後二時十五分河合會長の始球後大高の先攻にて開始、松高の如し球速三毛、墨番友志)

第一回 大高小林三振後野田右前安打に出で二盗、渡邊二盗、野田一盗強襲に出で野田生還先づ一盗をあげ野田二盗したが内田三打に退く、松高田淵野郎中前安打に出で直ちに二盗高橋三振捕後の暴投に一塁二盗を奪その間田淵本塁を陥れて同點、高橋三盗後吉川の遊脚一壘、高橋三盗後吉川の遊脚一壘、所本村三振、吉川三盗に刺さる一柳遊飛に止んだが松高一盗をリードす(松高二大高)

第二回 大高友真遊脚北村一盗高田四球三島三振に凡退、松高鴻四球、太田二盗に凡退、二盗に刺され二壘手の暴投に太田二盗に進んだが白川一盗飛丹山投假(兩軍等)

第三回 大高小林中右間に絶高の二壘打を放つて出で野田一盗失に生き小林三進、渡邊の投假投手の送球間にあはず小林生還野田三進豊田中飛失に生き中堅手の暴投に野田、渡邊生還内田の二盗に豊田も還り友真二盗北村遊脚に終つたが大高四盗を得て三盗をリードす、松高田淵二振高橋一盗後吉川三盗失に生き、木村の三盗一壘暴投に三壘に到り一柳も亦三壘暴投に生き吉川還る等渡邊通失に面目を失し木村三盗したが鴻遊脚に終る(松高一高大)

第四回 大高田一飛飛三島一盗小林三飛、松高白川のバンド内野安打にさなり二進、丹山亦バンド打してチャンス來り田淵左前安打して太田還つたが白川三、本間に抜殺され高橋二盗(松高一高大)

第五回 大高野田死球三盗、渡邊二盗後豊田二盗失に野田還り内田の左腕三壘打に豊田も生還し友真捕飛、丸投假に代つたが大高依然リードす、松高吉川四球二盗木村三飛後一柳亦四球に出たが吉川は三盗成らず鴻三振(松高零高大)

第六回 大高田三振後三島中右間に抜く三壘打を放ち小林の右腕飛に生還野田二飛失に生きたが渡邊一飛に退く、松高太田中堅安打に出で白川四球に續きチャンスは松高に輝き丹山のバンド打に送られ田淵三振に三死となつたが高橋中堅に好打し豊田の失策に乗じ太田、白川續いて還り吉川の左飛日光直射のため友真過つて二壘打して内田生還木村亦左前安打して吉川本塁に入り俄然同點となり試合はシューティングに百パーセントの興味を呼ぶ(大高ピンチを切抜ける可く二島と友真を代へる)一柳亦渡邊を過らして出で鴻亦一、二盗を抜き木村を還して松高、二盗を勝ち越し打者一巡して太田立ち投假に漸く終つたが松高激失に五盗を得極度の波瀾に兩軍緊張す(松高五大高)

第七回 大高豊田「ラツキ」セブンの最初一球を中右間に鮮かに本塁打して同點とし内田遊脚失に生き二盗、友真一盗、内田三盗後丸の二遊間安打に内田生還大高又もリードし續く高橋三盗、丸が高橋よく捕む、松高白川投假後丹山遊脚暴投に生きたが田淵三振、高橋投假に止む(松高零、大高一)

第八回 大高小林遊飛野田遊脚渡邊の中飛を高橋も又よく捕ふ、松高吉川四球三盗木村遊脚吉川投手の索制球に刺されて二死、一柳左前安打に出で投手のヴォークに壘を拾つたが鴻の中飛に殘壘となる(兩軍等)

第九回 大高豊田三壘打して出で内田一飛飛後友真一二間に安打して豊田を還し丸の二飛失に三進丸二盗大高又もチャンスに恵まれる高田四球に一死滿壘三島の二飛失に友真丸生還小林一、野田三振したが大高更に三點を加へ大勢決す、松高四盗を一撃に換回せん太田果然二遊間に總攻撃に入る太田果然二遊間に安打白の役間に封殺され丹山の中堅三壘打に白川勇生還田淵の中堅安打に丹山續いて本塁に入つたが田淵三盗に刺され高橋投假に万事休し十三對十一で大高に凱歌あがる閉戦六時二十五分

松高 田高吉木一鴻木白丹 遊中三一投右二捕左

大高(先) 林田邊田田島丸田眞 三島 友真 小野渡豊内友北島高 三遊捕三中投左一二右 104021203 一二三四五六七八九 20110500211

松高 田高吉木一鴻木白丹 遊中三一投右二捕左

大高(先) 林田邊田田島丸田眞 三島 友真 小野渡豊内友北島高 三遊捕三中投左一二右 104021203 一二三四五六七八九 20110500211

観 雑

野球と云ふは馬鹿にムキになる松江のスポーツファン、暑いなかにも怯けず集まること、野球はかり可要がらないで水泳とか庭球とかにもこの調子で押掛けて貰ひたいと誰か云つてました

野球と云ふは馬鹿にムキになる松江のスポーツファン、暑いなかにも怯けず集まること、野球はかり可要がらないで水泳とか庭球とかにもこの調子で押掛けて貰ひたいと誰か云つてました

野球と云ふは馬鹿にムキになる松江のスポーツファン、暑いなかにも怯けず集まること、野球はかり可要がらないで水泳とか庭球とかにもこの調子で押掛けて貰ひたいと誰か云つてました

野球と云ふは馬鹿にムキになる松江のスポーツファン、暑いなかにも怯けず集まること、野球はかり可要がらないで水泳とか庭球とかにもこの調子で押掛けて貰ひたいと誰か云つてました

野球と云ふは馬鹿にムキになる松江のスポーツファン、暑いなかにも怯けず集まること、野球はかり可要がらないで水泳とか庭球とかにもこの調子で押掛けて貰ひたいと誰か云つてました

野球と云ふは馬鹿にムキになる松江のスポーツファン、暑いなかにも怯けず集まること、野球はかり可要がらないで水泳とか庭球とかにもこの調子で押掛けて貰ひたいと誰か云つてました

野球と云ふは馬鹿にムキになる松江のスポーツファン、暑いなかにも怯けず集まること、野球はかり可要がらないで水泳とか庭球とかにもこの調子で押掛けて貰ひたいと誰か云つてました

野球と云ふは馬鹿にムキになる松江のスポーツファン、暑いなかにも怯けず集まること、野球はかり可要がらないで水泳とか庭球とかにもこの調子で押掛けて貰ひたいと誰か云つてました

野球と云ふは馬鹿にムキになる松江のスポーツファン、暑いなかにも怯けず集まること、野球はかり可要がらないで水泳とか庭球とかにもこの調子で押掛けて貰ひたいと誰か云つてました

野球と云ふは馬鹿にムキになる松江のスポーツファン、暑いなかにも怯けず集まること、野球はかり可要がらないで水泳とか庭球とかにもこの調子で押掛けて貰ひたいと誰か云つてました

野球と云ふは馬鹿にムキになる松江のスポーツファン、暑いなかにも怯けず集まること、野球はかり可要がらないで水泳とか庭球とかにもこの調子で押掛けて貰ひたいと誰か云つてました

SPARTA NOTE CO.

三、對技試合

倚達は白のり  
球場へのハズの中  
出陣の歌と部歌を歌った  
何らかの全属性の声がある  
歌をうたうことと比べては六かき  
横を足ると友真も  
丸を長いまつげと思も  
俺は俺達の感傷も  
恥しかったか或はうか  
何んともしれぬとも思つた  
及何故泣かやばあうめのは  
何うしてもやうかうかつた。  
試合が始まつた。  
俺はいつと指の尻を、  
一心へるそびこさへ  
胸が痛くあること。  
後の山で鳴いてる山神の声を  
いつもは思ひ出すから、  
となくシューゲーで

No.

名物である両軍共に荒けづりの  
腕前意氣を看板にお互に仲よく  
入れたり入れられたりして試合  
は續く菅田ヶ丘の涼風の裡に  
◇……この試合にこそしの両高  
校對校試合としては珍しくスタ  
ンドに突き出た名花二輪！  
◇……この日兩軍共に拳投が多  
い——「北東の風が強いため」  
と意に解釋しておく  
◇……第三回と第六回には、はじ  
めは松高にあまには大高に恨み  
つこなしにピンチが見舞ひ四、  
五點入り松高最後の奮闘で追  
撃したので観衆の喜ぶこゝろ  
「見てみて面白い試合だ」と悦  
びに入る、苦しいのはスコアラ  
ー許り前後四時間十分のなが試合  
であつた

SPARTA NOTE CO.

何、度か心配さ、女に後手勝つた、

十三、十一

後手も進め、芝草は躍つて

俺も飛出してゆまたの、

止、え、し、あ、い、さ、あ、い、

城、し、あ、つ、た、拍、手、し、こ、や、つ、た、

歌、も、い、つ、た、演、出、を、

こ、れ、で、す、ん、ど、と、思、つ、た、

予、期、し、こ、め、た、寂、し、ま、は、感、じ、あ、つ、た、

俺、は、此、の、時、計、が、更、ん

新、し、い、意、義、と、を、付、け、得、た、ら、う、

被、縛、令、か、

此、子、但、の、お、い、あ、ん、で、う、

此、子、と、一、番、嬉、し、い、と、思、つ、た、

此、の、氣、に、捲、込、ま、れ、俣、婦、理、吉、を、

不、幸、に、思、つ、た、

值、達、の、感、想、は、次、ら、で、

新、し、い、メ、ロ、ー、か、

軟、も、ら、抱、き、と、聞、き、こ、え、た、

先、昔、こ、し、い、い、い、い、な、つ、た、

Playing Member	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX
6 小林	SO 1			F-5 3		F-7 2		F-6 1	3-A 2
2 能勢								6-3 2	SO 3
5 渡辺	4-3 2				4-3 1	F-3 3		F-8 3	
8 豊田									
1 内田	5-3 3		4-3 1						F-3 1
7 友真		6-3 1	4-3 2		F-2 2		3-A 1		
3 北村丸		3-A 2	6-3 3		1-3 3				
4 高田		B		F-3 1		SO 1	F-2 2B		B
9 三島		SO 3		3-A 2			F-8 3		
得真	1	0	4	0	2	1	2	0	3
		1	5	5	7	8	10	10	13

25

- 五 思ひ出の人々よ
- P 内田英成
- C 能勢正元
- IB 丸 三郎
- 北村春雄
- 2B 高田 一
- 2B 渡辺 志
- SS 小林正三
- LF 友真久衛
- CF 豊田久男
- RF 三島 中
- Mng 田中克巳
- 部長 服坂教授
- 伊藤健太郎
- 門野正雄
- 先 華 國行義道
- 清徳保男
- 全崎忠彦
- 吉延陽治
- 増田正元
- 中島駒助郎
- 村山 高
- 小竹 稔

川勝常次郎  
吉岡芳之助

眼晴は  
心は浮ぶ  
官田は直に  
歌いたしは  
わんざいそ  
脚が情に  
苦しむを耐へ  
三三に勝利の  
涙流して  
わんざいそ  
帰る来んか  
歌の日を  
直に松江の  
ほとりんあら  
わんざいそ  
とて小舟出

# Evimeria

湖の  
思ひ  
あや  
つ

Pod.	inning Member	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX
6	田満	$\frac{213}{1} \frac{0}{8}$		$\frac{50}{1}$			$\frac{50}{2}$	$\frac{50}{2}$		$\frac{5}{8}$ II
8	高橋	$\frac{0}{0} \frac{0}{K}$		$\frac{3-A}{2}$	$\frac{4-3}{3}$		$\frac{0}{0} \frac{8}{8}$	$\frac{1-3}{3}$		$\frac{1-3}{3}$
5	吉川	$\frac{2-5}{2} \frac{1}{6+3}$		$\frac{1}{0} \frac{5}{5}$		$\frac{2-5}{2} \frac{iv}{B}$	$\frac{iv}{0} \frac{7}{7}$		$\frac{1-4}{2} \frac{iv}{B}$	
3	木村	$\frac{50}{1}$		$\frac{vi}{0} \frac{3}{3}$		$\frac{F-5}{1}$	$\frac{vi}{0} \frac{7}{7}$		$\frac{6-3}{1}$	
1	一柳	$\frac{F-6}{3}$		$\frac{5-3}{3}$		$\frac{B}{B}$	$\frac{vi}{0} \frac{7}{7}$		PBK	
9	嶋		$\frac{4-B}{1} \frac{B}{3}$	$\frac{6-3}{3}$		$\frac{50}{3}$	$\frac{vi}{0} \frac{3-9}{3-9}$		$\frac{F-8}{3}$	
4	太田		$\frac{4-3}{(4)}$		$\frac{ix}{0} \frac{viii}{B}$		$\frac{ix}{0} \frac{viii}{8}$	$\frac{1-3}{3}$		$\frac{1-4}{46}$ I
2	白川		$\frac{F-3}{2}$		$\frac{ix}{0} \frac{ix}{3}$		$\frac{ix}{0} \frac{ix}{B}$	$\frac{1-3}{1}$		$\frac{ix}{0} \frac{ix}{(11)}$
7	丹山		$\frac{1-3}{3}$		$\frac{1-3}{1}$		$\frac{v-3}{1}$		$\frac{6-3}{6-3}$	$\frac{ix}{0} \frac{ix}{8}$
	得点	2	0/2	1/3	1/4	0/4	3/9	0/9	0/9	2/11

SPARIA NOTE CO.

No.

はやし風 福田の木は、あまの供すいな、あまの波のやほの土は、  
 四角備線途中  
 曇風雨まよけは、いさし線踏、あまの唐まの、ははゆきやまも  
 向う丘の木の、葉まわわてうらが、葉ま、うらの白ま、まよしとま、  
 あらしまよ、湖のくも、色や、重く、まらうて、は、まよせくま、  
 湖、あまの木の、葉まの、あま、あらしま、あま、あま、あま、  
 古への民族、穴居の穴、あま、あま、あま、あま、あま、  
 太古の、こ、思は、ま、あま、あま、あま、あま、あま、  
 草千山の、な、ま、あま、あま、あま、あま、あま、あま、  
 は、あま、あま、あま、あま、あま、あま、あま、あま、あま、  
 大山の、西の、あま、あま、あま、あま、あま、あま、あま、あま、  
 した、あま、あま、あま、あま、あま、あま、あま、あま、あま、  
 南風、煙の、黄色く、あま、あま、あま、あま、あま、あま、  
 日野川の、水上の、あま、あま、あま、あま、あま、あま、  
 上石見、あま、あま、あま、あま、あま、あま、あま、あま、  
 高梁川に、した、あま、あま、あま、あま、あま、あま、  
 百合の花、煙の、くまに、あま、あま、あま、あま、あま、  
 雨、あま、あま、あま、あま、あま、あま、あま、あま、  
 雨、あま、あま、あま、あま、あま、あま、あま、あま、  
 川の、あま、あま、あま、あま、あま、あま、あま、あま、  
 X 名取、あま、あま、あま、あま、あま、あま、  
 26. 87 眼、あま、あま、あま、あま、あま、あま、あま、あま、  
 27. 28 眼、あま、あま、あま、あま、あま、あま、あま、あま、



松江の思ひ出 (五七、三)

概念的抽象的な詩の一連を私は幾らか

つらげ書くことであらう。

遠くへと行くの松江まで出かける行そ

行くのもてある人を 返恩の

白ペンキの匂が自界にしきつそと木をい

その感触が手にニびりついでぬ

ほくはろばると 思ふは

湖のまりの柳へしめつほいそ木の

思ひ出のそふしはに、泣けて来たよりのたあ

その二

うたオロキ

おこさない 豊國風なまいまあうも

私にはあの世迄としたらとめのない

東洋の感触の詩かこいし

あ、何と遠くしめもなつあしいそ木とあう。

その三

古城の、菫、陽に 照りかへり

老松の、枝へ 葉かく木で

鳥、巢を つく。 時ありて 申すこと

無神なものあり。 あ、その、しみじみとした、光りよ

## その四

夜深くほくら、湖上へ舟を漕いだ。

櫂の、立目の、たふろなと。

行手を、いづこか、あゝ、嫁か鳥の。

灯も、消えりではないか。

櫂へ、まつは、昔は、執念の、

魔女の、腕か、あゝ、わらう。

昔ま、生命のかたしとを。

深く、思つたではないか。

松江大橋、流水よまゝいよ

和田貝通いは、舟をさす。

## その五

水御の上をしまよ。

せうたをとりかゝは、銜一杯のみぞと。

しを、誰ぞ。

女手も、節をまわしてはく、小なかつた。

## その六

(五七三三)

あの湖のほとりて

女も、きはし無、知日のまゝ、ト、こゝろで行く。

お小達も、苦しみが、まな、かゝらう。

いつか、亡いな、けな、は、な、る、まい。



なまじつかなアレテウラヤリスが  
おん達の苦しみの甚だ。

— セイチヤシ 後チヤシなる女達に —

その七.

甘薄暗い座敷で

飲むお茶の 緑のいろ

庭のあぢさゐに降る雨は —

その花の色もしつとりとサ落着い柳 <sup>て</sup>

あ、沈々と夜は更ける、その

茗荷の花に 然るが居るではないか。

*Shoelle*  
— *idealistic Nature* —

その八.

二つの叫びがある。

トレアキサン、トレアキサーン。

負けるものか、負けるものか。

耳を打つ叫び。

氷久にさる今うたない叫び。

その九.

まひる、キラキラと <sup>氷</sup> 佛のかたまらぬ。

集まり、廻<sup>まは</sup>って、昇<sup>あ</sup>りて、行<sup>い</sup>つた。  
 まんいな、雲<sup>くも</sup>をなと、俺<sup>おれ</sup>達、見<sup>み</sup>てゐた。

その十。

~~赤い瓦の、漁師村。  
 文化村にも、似てるよと。  
 下<sup>した</sup>が、根性<sup>こんじやう</sup>の、友達<sup>ともだち</sup>が。  
 ずました顔<sup>かほ</sup>で、さいました。~~

、疲れた人をも (セニシ)

夜遅くバスに乗った

ぢいさん (いやな奴だ) が

女車掌<sup>にょしやう</sup>と話をかけた

さん八時<sup>はちじ</sup>内 (労働時間<sup>ろうどうじかん</sup>) が、えらいやうな

女車掌<sup>にょしやう</sup>は泣<sup>な</sup>いてると思<sup>おも</sup>は

お互<sup>おたが</sup>にもつと強<sup>つよ</sup>くならうと思<sup>おも</sup>った

須<sup>す</sup>之<sup>の</sup>管<sup>の</sup>海<sup>の</sup>水<sup>の</sup>浴<sup>の</sup>場<sup>の</sup>で (セニシ)

日本人<sup>にっぽんじん</sup>といふ民族<sup>みんぞく</sup>は

朗<sup>らう</sup>らかさのない民族<sup>みんぞく</sup>だ

もつともふんの腹<sup>はら</sup>工<sup>く</sup>合<sup>あ</sup>の故<sup>ゆ</sup>りよと本<sup>ほん</sup>ぬ

## その十一

稲田を、<sup>あらし</sup>曇る風雨の、し前駆が、渡す。

さうくと、靡く、稲の、葎、夏の。

光は、は、絹糸の、やはらめ。

あ、向ふの、立に、<sup>うしろ</sup>五加の、花が、ゆふてよ。(三、七、二四)

## その十二

い、あの世界の、あの青空を、う近いものとは

何うしても思はれない。

と、木かあらぬか、プラトニズムの、使徒達は

深い懐疑の淵に、陥る。

想の、い出の、せりり、いであの世界へと

自らその、生を、短くしては、あいか。

雨空を、う閃く、<sup>こぼれ</sup>微光り、如く

想の、<sup>エッセンス</sup>起の、微光は、まるとも

俺の、<sup>エッセンス</sup>三、七、二四、感、受性も、如何せん、だ。(三、七、二四)

## その十三

俺の本マードは、鈴、サ、嵐の、匂がある。

(三、七、二四)

増田正元を訪ふ (七、三三)

林の木蔭の空に乳青けはまきみをもかきも体<sup>み</sup>を<sup>ひ</sup>愛<sup>ま</sup>しかれり  
林の中の寝台<sup>のま</sup>は<sup>た</sup>活<sup>き</sup>ず<sup>き</sup>ま<sup>な</sup>くなりし時<sup>ど</sup>各<sup>お</sup>間<sup>の</sup>ど<sup>ん</sup>ひ



虹 (七、三三)

夕ぐすの車の空のすすむろさふく見つせは 虹のこらぬ  
や、とそいすらあかり車の空にいたる 西空の雲、すすめたるらし  
夕ぐすの赤まきは小田の水にほのほの、うり~~蛙~~鳴くなり  
夕ぐすやけ~~蟬~~もなまご急やめんとす、大穴の虹、すすらみにけり

線路工夫 (七、三三)

汽車は貨物の車を牽きまわす工場に入本は止まり笛鳴らす。  
貨物車の連うことごとく赤土とつち、二十数台の均整の美しき。  
汽車とまは一台、工夫一人、乗って赤土の山おしくつす。  
赤土の山おしくつす工夫らのふりあひるしやべん、<sup>山前の</sup>挿入。  
工夫らは声を出さず、一有ん土人す立日の佳本は高し。  
かくかくとしはし立日あり人声なし、貨物の土赤土は次の赤土をなす。  
自分の車の土おろしたものは陸の車たいつり、~~車~~又もどへん、<sup>土</sup>上す。  
皆土をおろしまつた本は、列車から下籠下り、汽笛鳴らして、汽車、<sup>土</sup>ま出す。  
二本で仕事おすんと、東の空の虹見てる。平城で教あつてまある。  
線路工夫は大方、鮮人の工夫なり、東の空の虹見てるなり。

四高対横工戦後(七、二七)

同感出まるといふはうなつてより戦後の四高生の南下軍の歌  
コイヤの大学生が自ら挨拶して

お前も一緒とて寫し直るとも場にはまていやとどのか首あつて  
何だの云はれて冗談に構つて子供みだりになつて早のさのフネー

此の人を以て國行、清徳内野、村山をまはす。

南下軍の歌の繰返し既に四回より傳うそらく帰らうとする  
勝つていふ法を流して人々はこれから後いかにとするべきらう。

Was wollen Sie tun?

Das geieken fühlten wir!

Und jetzt hoch wanderen len murmeln

Was muß ich tun?

21 わかきいってたえかなくしてこのニになめをなしたるをわすれ  
わかまの純情の感激よまことの正体は何とておれ

はみなかうしか、はなせなうしなと

泣きもてあうあうみ青せい 泣きもてあうあうみ青せい

槐 (五、七、二八)

槐花咲いて

思ひまゝ 幽か

大空の青にまどくす

槐 花咲かるとも

過あまた昔な帰らいか

あはあはとした悔いのころろるあま。

槐 青空の下

花を二ははす。を三はかとなま

かまな花の雨である。

寧楽の都 (五七、二九)

寧楽の都は青丹下し

伽藍の階を乙せ達か

裳を引いて遊あはたはむたた時代

そして又地方では

純朴な田舎乙女が地方官の

貴族の子息乙女達と従あはな

唇を捧あけた時代

地方の青年達は

真々しい軍服をこねんで防人になろ行く時代

父と母との間に、

防人にならして、細竹の念門をいぢり、手紙の情みださし、思ははれ

五中の子のまじり、一つのお根とむしり、そのための体と殺すよ

中にもい時、おとら良、おたのめ、おれと父とつら、人か、あ

りました。(奴隷と思はぬの、おれのおれ、おれ、おれ)

けのむし、おんて、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ

福の、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ

おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ

おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ

おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ

おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ

今も、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ

かく思はは、現実を、義者ではあつた。

(不然乎、湯を煮る者)

浪漫化の、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ

この部を、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ

士民達には、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ

おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ

おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ

おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ

おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ

おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ

おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ

おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ

おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ

おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ

おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ

おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ

おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ

(不然乎、湯を煮る者)

高甲陵の歌 (五七世)

一、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ、おれ

No.

11月 梅のつぼみ (八月八日)

12月 梅のつぼみ

13月 梅のつぼみ

14月 梅のつぼみ

=

15月 梅のつぼみ

16月 梅のつぼみ

17月 梅のつぼみ

SPARTA NOTE CO.

No.

純情をせめて嘆きなりやか青春の空音の

丘の彼方へ消え行くを

二丘にまろびて仰せ見えたかの女君の星辰や

銀河連り流るるも下動の相 すまね ニニに見え

理想の途やニニに見え

三 椒橙茂り深くともし いづま 睡 いづま つかまつらん へき

同朋よ賞醒めよ卿や香ふ地 よ 平 よ 車 よ 二の丘に

希望の光来れり

四 眞理は遠く道長し あす 心 あす 樹 あす 本 あす 夕 あす 暮 あす 有 あす 丘

丘の息吹に嘆きとも朝の鐘の鳴る毎に

起して進まん新しく

夏の雨籠 (五八二)

227 雨止かをまると鳴き出る夏の蟬 あせ 木の葉 あせ 中 あせ 滴 あせ するに

思ひの散歩 (五八三)

日々の務として小 あせ 家の思ひ あせ 犬の領 あせ びませ

散歩せしおるなり

神の使降りたまふやあらむ あせ 西 あせ 空 あせ の雲 あせ の あせ いろ あせ けい あせ は あせ ち あせ たる あせ し

い あせ ス あせ ラ あせ 光 あせ に あせ み あせ 実 あせ 花 あせ と あせ も あせ ろ あせ 人 あせ の あせ 土 あせ は あせ ち あせ とき あせ に あせ 立 あせ ち あせ 雲 あせ の あせ いろ

眞 あせ 珠 あせ 貝 あせ の あせ 持 あせ てる あせ 光 あせ 沢 あせ に あせ き あせ む あせ 似 あせ たり あせ パ あせ ラ あせ イ あせ ゴ あせ 雲 あせ と あせ ち あせ む あせ 似 あせ たり あせ ち



A. 湯屋の入り口  
声無き犬とつたるすけしき  
おやう草子とまゆく

二

草子の白ほのかにして  
おとんほ  
とへてくるのあひある

三

とほくへ見え蓮の花よ  
うん木馬  
たんのん押しせまる

四

夕の雲のはしん  
まの残る光

大の三喜き宴をと思ふ

五

夕ら木に楠の梢は秋であ  
見上りて

六

お中へのゆんか  
お中へのゆんか

咲く堀あつて

咲く秋もある

X

ワカボとエカを楠の小枝は

楠の匂、嗅いで了

B 南極

氷山遊ぶさやしい海上

あふあふて生物

いしを作す

二

9 夏は氷とけて

そとに木本をの鳥の巣くら

磯

三

10 南極すの星

これは捕鯨船の

エカレるまのりてあす

四

11 夕方

海

芒のこころ

捕るて来た鯨の腹をあす

SPARTA NOTE CO.

夕の木を大ま里つたて行かぬ巨木と人はあなる

ゆめゆめの古街道のぬちのくま犬とあふとはおしたまうたつ

道の道のほのらぬ山雨空をそかいたままつころのいろ

向の電燈の光ももる電燈の数はもうけど

ゆめゆめ野も果しなくいろぬとほ村の灯ももたみつあなる

とほ村へ人は焼かぬ煙となる寺の鐘鳴らぬまきこえまぬか

ゆめゆめ山にともる高外よりくすいしきまこり

思大いすくう道もひのふまて口由吹けは誰かま

大イストフエスおれはあちるお村はふれ首を地にさめしく雨あうり

草屋地近く犬は大便秘すなうけうたはもち待ちて

犬の草の田圃畦道まきまて大まわゆしとおまのふあづ

二のふは何の能なく弱きいぬ見つめてあふは誰をこの

すへなまはなとまの思つたの網ひく力

ひたひたの草履音と甲斐道まきま人のかほ

朝涼は太寺の堀ん咲き満てる白蓮花の上に風渡るの石

か魚の目止しちふは祖母とみ寺へ参り蓮葉もろんま

蓮花のもてる寺奥を帰るまの電車の中ん感とあたりま

おは寺のめぼりの蓮花をすす遊まし人ともか(り)こむめ

塚口克己君の百の縁起寺町鳳林寺あり

三浦久一郎君、阿部成男君、山内禮之助君らに来て  
 ぬた<sup>式後</sup>阿部君の挨拶、去治臣の私状報告、お久さん  
 活耳、(五、八、四)

田ののま、ん生けしおみうおおまのま、ん生きてお生けるおの中寄りの  
 おむのま、ん生せしおみうおおまのま、ん生きてお生けるおの中寄りの

おほろのわかをしおをなおいつおつおん知れ人断くは士しおのまけり  
 X 高石(海十次)んゆき村田幸君、浅井君、神崎那君

船中、アサ君等と会あり、ア方、浅井寺の飯食の味  
 遊いゆ、浅井君のねえさんもい子供がうんもあ。

浅井君の栄、娘三子の前もききおしおあり  
 わたのしわを知り人のあつた<sup>おどろ</sup>といひ出るは、おれんけりあも

X 帰らん麦わら帽をぬる  
 こ木をきりぬあんとお(毛)りて、しおりまぬ、仙やうとさおあつたおん

254  
 めく帽を、しおりてぬか、いりまの一人とな、か如まこそす。

火の見半鐘 (五、八、五)

今日生火事

半鐘のまきゆりといふ、活声にはのんややてみ、<sup>女まくらし</sup>

たごまさん口は、おはひくと、なんげり、犬吠えおつも、うらの中かた

257  
 妹<sup>は</sup>ら火事時の用意活しぬ、女<sup>の</sup>弱きをま、な、かまぬ

No.

死の南極、わーレストを観る(五、八、七)

氷日に光りて何もない陸、空に雲目する

何も無い陸の果の海生物あり、群れんふれて

夏には本車を生ゆるところあり、二二の鳥に車食の

氷をとりて、フヨンドに捕鯨船遊ぶ

澄む空に走る銀の光、外に見る人なし

氷の上踏む靴音、夏で故郷を懐く

夜、南極十字星、風吼り氷山の蒼ふ音

ペンギン群あり、軒下の砂原、話かきこえ、夜事すもむなし

ペンギンも観あつて子と育てる、二二は南の果地の書屋をころ

海辺にわころの海家の子やまうまうと

あふぬとむらうあき海の家、たいしんの五ほいつに

二二から故郷は見えぬ海のはて雲か立つを白雲か

ゆの方海甚此て来と捕つた鯨の脂はあき波

鯨のばはらで、忙し脂肪の塊の白さ

鯨を追ふ船のモヤン休まず、砲手艇いよつて煙草のあ

ゆの方氷山行手いぬく牛のころのいろその頂に

x 沙漠のまん中、雲一つ、二二は又何といひむす

死骸ばかりの雲を陽か、水や、沙漠の風、壁に

二二に死んだ人、幾人、腐れはこゝと人もは来ず

SPARTA NOTE CO.

No.

沙漠を一人とぼとぼとゆく人のこゑの強さ

赤い夕日、おしたの来まで夜の砂原を穿つものなし

ぼつと火か止るを、雲かもえを、勇士達の骸が

皆を死にばてた、聖堂は大洋の幽霊船、いまも黙る

砂のあなや、涯をくはてなく、二の旅のさゆし、星のこゝし

ころた死んで横た、大きな体のかけ土の黒く

らくだの骸、遠くからも見え、あらかうあうあう

x かやつら草ほのかの匂、そと、ぼんぼん、ぼんぼん(五、八、八)

夕ぐれ、木を大を、大を、木を、木を、木を、木を、木を、木を

蓮の白花は、夕雲の端にまたのころ光

と、夕ぐれ、夕ぐれ、夕ぐれ、夕ぐれ、夕ぐれ、夕ぐれ、夕ぐれ

夕ぐれ、夕ぐれ、夕ぐれ、夕ぐれ、夕ぐれ、夕ぐれ、夕ぐれ

x 夕ぐれ、夕ぐれ、夕ぐれ、夕ぐれ、夕ぐれ、夕ぐれ、夕ぐれ

刈られた楠の梢を見たり、おの如く、おの如く、おの如く

秋をおもつて、おの如く、おの如く、おの如く、おの如く

x 秋をおもつて、おの如く、おの如く、おの如く、おの如く

楠の梢、おの如く、おの如く、おの如く、おの如く

代りおとせ、おの如く、おの如く、おの如く、おの如く

楠の白く、おの如く、おの如く、おの如く、おの如く

看二八頁、うら、うら、うら、うら、うら、うら、うら

EPILOG

No.

偶々買つて見た井泉水の集本

韻律に對する最後のHENTとなつて眼を開けてくた

今までの三十一文字型内に於て苦しき奴方も考へて見れば精進

のためには古なしまもつてはなかつた

二十からは「男敵」ついでに「女敵」と作つてゆけるであらう

ここで「僕」の存在を「雲」第三集を「紙」の「かほ」こゝにあるか

紙の「柳」合上も「か」書まつたけり「か」しと「か」い

X X X X X

14 槐 おぼれた ぬつた 窓の

17 雲 雷のおと いくみは

雲の高きだ 雷するは (ハ) 雲の橋へ 蟬来てするといふたて

X X X X X

15

秋の 一すぢ道を行く 朗ふさだは 日曜文 弟たちをこゝろの

ほくの 歌のめさは

雷の音する 留守居

X X X X X

16

棟の 新枝拾ふ 太い板には

19 光の 海を 想ふよ

成程 奴力 ぬかしぬ

さし波の 列 泳ぐ子 水の海平

X 夜店

20

一すぢに 赤い 鳳仙花の 夜香の 植木屋 (俳句) ハ・セ

21

まほろけの ころり まほろけ 夏休の 半ばすぎた 夜

22

まほろけ 大女のおめを 漠然と 感じて つかず 棋のこころ 停つて

23

つかず 棋見を 童心の 大人を 知る またも ちぢく つかず 得ず

月いよ ちぢく 眠する 深し (月泉水)

SPARTA NOTE CO.

(七一〇)

No.

24 月夜のおと せうと 鉦叩き さんなきの びておの 杉の 梢に

おほらうのおの 家のむいこと ぼる 月の 日軍かゝる 風なし

X X X

25 月のお軍ある 夜 雷柱 原の 32 生 駒山の 灯が つらなる

向ふん せんさん 灯つてる 星座の まらめかしきと 思ひあ

X X X

26 ちぢりちぢりと 月の 虫と ぼるまて

おんく とほのく ぼるしあみち 33 女の 子ばなりの 店 ぼるまの 後

X X X

27 夜更の 電車 窓や なく

手紙を のかし 尾燈も (二曲りと 二麻子)

X X X

28 埃立つ道と 話して ぶつて

埃あとは あり 日雲を た 月の 光 鳴る 鳴る 他も たんおと ぼる

X X X

29 月へ 吼える 大か のなしも 35 帰本は 出ぬ 夜も

月夜中は 目覚めるかな 青蚊 張釣る 体に入ら

X X X

30 大の ぬき 氣配 窓の外に

夜更けと 月は 見ゆるものか

X X X

八月十二日、本位田君と心づう後活き一船長々に

泊めてしよ

36

今に今にこの心ざしを憤慨と住つては  
結局はみきい(こ)白己止肯堂ん終りのか

x

37

西朝氣の漸次ん消えてわぢんまうした  
おぬか巴まついあまをまいて

x

38

かま船の女は船船正化転すませは  
とんくと掃子そのほろのたね(たは位田君へおくる)

x

39 オレサイレと合奥の舞え

旬りの手ないな果物の新宮なん其飲をぶしつけない

x

40

おとかいのやせもまじしく  
やかてえぬやかておんの春春も消えろのか

第二の故郷あると(八月十五日)

41

ほくらあかし描いた浮世歌集今も  
わそよを世に実生しよ

x

42

お、目撃の陽のうしろにをけやうもの

一そんなこととまはなかつたときもあやし

x

43 幼少生してわろ生かまゆりの

集つてこのも子供の書すまむた

x

44 洋館には古井のて指も取つた  
あ、友とちと手木に其の噴水

x 阿部武雄君へおくる

45 大人のこゝろにならぬ友とよまい思つた  
わそよ生ひゆかたあたらに

x

46 土のすりのほくらころのあまを  
おぬかたことをまきんじよ

x

47 幼少のわのゆきもぬ染きたて  
このみちい何のなりのを感ずる

x

48 幼少の幼年の埋もれたる草原を  
おけまはつて人たの解動

x

49 ゆかりの桔梗は桐井をたてたおぼろのす  
ほくらもあつたよ

x

50 阿、二の草本みきを  
ほくら幼少はあけ  
まはらしていくとこ  
んなことか

x

51 ゆかりの桔梗は桐井をたてたおぼろのす  
ほくらもあつたよ

x

△51 聖雲舎、セノ本ノ一 (八月十四日)

新倉島の悲しみをここにふまける人もあろう

△52 古釜と前と立てるろりそくの立つて早し

ここに感傷がある

△53 おい古の物本は日まの習性だ

この宿を古釜地に集る群のつつまし

△54 中田原提灯の火も消えるではな

よるが又けな古釜地は又ひつそと射るのだ

△55 久し振りの澄んだ夕日の海は

いゆつもおさまる

からの潮だ

△56 四国を離す

その國原に立つ雲は國のためをとおほつて

△57 ここに素朴な一帯がある

くぼしんとアレストの時を費すのだ

△58 久しかりへ 勉強のころか

胸をおかへるおんして帰つてくる

夕の木 (その二) 八、一

59 野の果のガスラシク煙

60 大鴉田圃を低く飛んで下りた

61 送電柱の高さを見上げる

62 隠え豆の畑まをまわ便するおや

63 山の群むの素

64 夕の木にならうとする

65 野寺なる鐘の幻聴

66 夕の丹波境の山

67 夕の丹波境の山

松江の旅

一、山陰線

書煙にまききりす啼く鳥もくろしき。汽車過るにゆるたまゆらも聞く  
線路ゆくこと大まきカーブして赤いシガキの旅心かこころ。

小石よりま河原に候ける月見草午近くして赤くしほみたり

河原の芝につなみ小ほしいままた尾めり草食馬のかはゆす

田圃の畦とあぢ花よりし遠方の山脈の上夏雲立てり

丹波の篠山あたり小盆地めぐる山なべて白雲おこす

何もなままるま草山 日のまひる 黙のけりゆく小水を夢みたり

何もなま草山の柳かざる此の青まか中を雲 動かしゆく

何もなま丹草山まのぼる人やはりあらんか踏 つけるあり

汽車まらぬ小駅の村の花畑カレテ大まき咲けるを見たり

山向の小村の学校の運動場赤帽の子等整列してり

雷嵐の名残はしるく城崎の町の屋並は百新しき

雨と岸ん芦群生(る丸山川海近け小水や流のゆるさ

日本海の青潮にすす陽の光波はまうそふせ来たるかも

磯の四のいりせ深生あふあたりすう青潮めぐるをのなしと思ふ

日本海のしほ寄世来たるこの港あか瓦の家 か たまらぬ

この港の防波堤をすは岬裸岩根に

浪砕け たけ

風や小や鈍く光射る波かしろ磯の小島へ来たは砕くる

トネんと出つ人は青ま波のいろ眼に涙みてこころをみしむ

隠岐の島はばせ赤あふ日本海煙霞淋々何も見えざり

古への語かきし湖山池めぐる山に雲かかるとなり

砂丘にまばらに生(る)姫小松 丘の外の空のたひ色

伯耆山嶺はあうはれせめし山肌と雲もあうがあうはなる色

伯耆山嶺のつらなう長く此かざる、この一列の聖堂ためし

は、まゆのまゆの空や山陽道何かあうまや雲立るとなる

白雲は白しちかうつ、まゆのぼる、山のそがひにんかあうま

大山の裾野の原は低まうて流る、果は海へ入るかも

大山の裾野桑畑草を刈る乙女の家は遠からしと思ふ

大山の北のそまへ(る)山脈の眼にあうはとていとまばり

大山の尾ける傾斜の、いしくしさまなこかみすして裾野ゆるる

安来まで此の汽車旅も終ると思ふ 棚の荷物をおるしをたう

二、松江滞在

八雲をたつ去雲の國は眼下に嘯ふと見あかぬ山川のいろ(まき)

練羽中後の山に鳴くせみのこゑまき中ゆるは、いれしまあもよ

城濠の蓮や、しほまきあへしほく小水に流るまきりつる時に

何事もいふまじとまあしあつく、しほの ひ みつくこの日のまき

まきわたりす鳴く声しげまきこの書は ま 追ふ友とはななくあま

こほく来たは、夜の散歩士(おさうかお)田舎の

街とおとしめあるま

たけ

旅籠の窓先はゆる、めん竹の柔りん、いりまき

大島は老松の柔中と立立とわの眼の高きに舞ひあうま  
宍道湖の湖面をすする帆船あり(だ)考はげなば、いりまきおとしむ

かにかんたける心は抑(かたし)の心はもよほしとゆるしめる(誠意)  
自らは戦い得ざる身の弱さかをしとおもひかくて時過るも  
友のちの七比ひかいてをなめあめるおなじ心のゆるなうなく  
喜びの表現はそんな木めずともいふしはすむとにいぬかゆつる  
皆人の酔(よ)おもて見えてあふは酔(よ)まゆさ(した)くなるなり  
友のちのおろかなたはあふこそたのしさをしらとして見入る(べし)やまみ

三 伯備線

あらし  
暴風雨来りけはひししと線路わたの唐土の香はゆかてやまも  
向つ丘の木葉さわめてうらかへる葉のいろをししと思つ  
疾くお世稲田わた木はなま伏す稲葉の波のやはらかさはし  
嵐来り前の湖の曇り色や重んみかえ 波立つる見ゆ  
湖わたの松の木葉のほふ光りあらし来りあらしの幼さよ  
太古の民族穴居の跡よりさこの丘の田の此系陽花のはな  
ぽつくと雨あう出で、窓にあたり山陽道に汽車むた向ふ  
大山の西のふもとをぬめぬる汽車へあるなり日野川に治む  
南風畑と黄をくほけりあたりの空を気重苦しげな光りいぢりし  
日野川の水上の浮る汽車へあるなり思ほゆるあな  
上石見すく木は既へ山陽道(雨)は止まず(三)ころ  
百合の花畑のくまへ咲きた木はその山畑の

あらしまか

雨しふく山の林に鳴く蝉は一匹ふくやなまつせはあらず

雨中へ行く蝉の急ぎみとほう心かたあけ聞いてあるなり

やかに別れ友をさむしとおもひあるこの山園の小駅の露初に  
川のわたぬする人あう里遠みあをう人なしさかからずや  
眼おふ木は頭重まいるゆ後高深川も太まくなりたり  
の、せんいつら花茂みもさし山畑の畔の溜木にまつはゆる見ゆ  
丘の下木の木の間の墓石にいまはしまことまた想ふなり  
印南野の丘への墓地の夕々木に心おそふまこと人にあたるな  
夕々木はいそへあせる波のいろにひらきしく旅も終らむ  
あはぢのやいはや燈台の灯一つあふらはやかに別れをあのみ  
夕々木の海水浴場へ人はあらず電燈の光もまじしさを知らず  
夕海の里へ波ふする音まじし友とあたるさむしかるかもし  
しばし別れ木はなむ旅の終り皆冗談を言ひあはすなり

四 帰郷

桔梗のつぼみふくらみて色に赤づ旅のことから思ひ出るなり  
かへり来ていつかはさむし我の家を友のあはれなり想ひたのしむ  
さむしとのしし食い入るあゆのあたり友本の軒へ蝉鳴きをきく  
何れの手には着かずも旅づあふししと思ひあはれのたふさ  
目的をさげた後の味気なさをすべまこと見付けゆゆなるなり

